妹様に憑依しちゃったよ！・・・・・・嘘だといってほしい・・・・・・

妹さま大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妹様に憑依しちゃったよ！・・・・・・嘘だといってほしい・・・・・・

【Ｎコード】
Ｎ６５７８Ｚ

【作者名】
妹さま大好き

【あらすじ】
平凡な女子高生がなぜかあの吸血鬼の妹に憑依してしまった物語です。
憑依系のフランなんて嫌だ！狂気のないフランなんて嫌だ！という人はバックで！！

転生？憑依？マジで？

？？？　ｓｉｄｅ

みなさんこんにちわ！こんばんわの人もいるのかな？

私はどこにでもいる平凡な女子高生です！
勉強平均、運動平均、容姿も平均、すること成すことすべて平均が取り柄……言ってて悲しくなってきたよ……

そ・れ・で！どうして私がこんなことを冒頭で言ってるのかというとですね。

なんというかですね、よく二次小説である転生？憑依？みたいなのを実体験しているのでありますよ。
魔法とか異世界とかそんなファンタジーじみたものとは縁も縁もないこの日本に住んでる私がですよ？あ！もう日本ではないですねここ……

よ～し落ち着け私、さっきまでは元気に見せていたけれど……

「ものごっつう不安です！！」

あ、なんとも可愛らしい声が出ましたね。ああもう！前ふりはよしましょう！

まあさっそく言ってみるとしますと……私が転生、もとい憑依した人物が。

「フランドール・スカーレットってなんでや？」

そうなんです！私が憑依した人物はなんと！あの東方に出てくるありとあらゆるものを破壊できる能力を持ったロリっ子吸血鬼なのです！

ん？なぜフランドールのことを知ってるかって？それはですね、よく友達に勧められた二次小説を読んだときに度々目にしていたキャラクターだからです。ちなみに私は東方のゲームは幻想少女対戦紅しかやったことがないでござるよ。

ていうよりもゲームでも小説でも思うことなんですが……

「フランドールって狂気に呑まれていろいろやっちゃうキャラだよね……」

フランドールはたしか４９５年もの間地下に幽閉されていて力加減

ができずたくさんのものを壊してしまう、そして気がふれていると……

「ふふ、すぐに壊れないでね？……とか。」

「アハハ、タノシイネ！スッゴクタノシイヨ！モット！！モットワタシヲタノシマセテヨ！！……とか言ってますよね。」

うん、一人でこんなことをこんな薄暗い部屋で言ってたのは自分でも痛いなと思っていますはい。

「でも……まだ信じられないんだよね～これが現実だなんて。」

そうなんだよね、未だにこれが現実とは思えないんですよ、もしこれで「フランとかキターーーーー！！」とか言ってバカ騒ぎした後に全てを忘れて目が覚め学校へ登校～に決まってます。

でもまあ……

「せっかくフランになれたんだから試してみたいこともあるわけで。」

まあこれはフランドールに限らず何かしらのアニメ、漫画のキャラクターになったら試したいものってありますよね。某死神漫画に転生したら瞬歩ってどういう感覚なの？某魔法少女の砲撃ってどんなふうに撃ってるの？とかいろいろ、言うとキリがないです。

よくある二次小説でも感覚でできるみたいな感じですけどそれがどういったものなのか読者である私たちにはわからないですよね、だからそういうのも含めて今この機会に試してみたいと思った次第なのです！

「まあとりあえず……」

懐から何かカードみたいなのを取り出してみる、うん。スペルカードだね。

「なになに……スターボウブレイク、恋の迷路、そして誰もいなくなるか？……」

はい、フランドールのスペルカード全部ありましたよっと。

「まあ今はスペルカードなんてどうやって発動すればいいのかわからないので……カード名を宣言すればいい的なことを聞いた気もするけど今は置いておこう。」

とりあえず能力検証いってみようか！
え？フランの能力のほうがスペルカードよりあぶないだって？まあ私も言って気づきましたけどそれはいいじゃないですか。

「確かありとあらゆるものを破壊する程度の能力って……掌に破壊する対象の眼？を持ってきてたよね。」

たしかそうでした、じゃあさっそく眼を掌に……

「……」

どうやって眼って掌に持ってくるのさ！？

「まさかのストップ！一体どうすれば……掌に対象の眼よ来いと念じてみたりしたらどうかな。」

こんな簡単に来ればどんだけこの能力発動するの簡単なんだよ、そんなことを考えてみながらやってみる。

ーーヒュンーー

「あ、できちゃった……」

なんか出ましたよ私の掌に丸い白色の球体が！これが眼というやつなんですね！でもただの球体なんですね、眼球じゃないのか……当たり前か。

「それでこれを潰せば破壊できるんだっけ……」

やっぱい、ドキドキが止まらないよ！決して狂気に呑まれたとかいろいろなものを壊したいとか思ってるんじゃないですよ？

とりあえず私が対象としたのは目の前に置かれていたクマのぬいぐるみです、ごめんなさい。今になってかわいそうになってきました……

「……まあやってみようかな。」

そこまで派手なものではないでしょう、あれは小説とかだから大げさに書かれているだけであって実際はそんな……ねえ。

「確か合言葉は……キュッとしてドカーン！」ーーギュッーー

ーーヴァガーーーン！！ーー

「……」

あれぇ～？なんかプラスチック爆弾的な爆発でしたぞ旦那……いや、近くで見たからそういう風に見えたのか、うん。きっとそうだ。

「いや～それにしてもクマちゃんのぬいぐるみ視えなくなっちゃったよ、それはもう毛すら残らないくらいに……」

うん、この能力は危険だ。小説を書いていたみなさんごめんなさい。たしかにこの能力は危険なものでした！！

「でもこういう風に能力使うんだね、勉強になったyうわわ！！」

ーードン！！ーー

「痛い～、鼻もろにぶつけちゃったよ、血出てないかな。」

ちょっとフランの能力が使えたことがあまりに嬉しくなって足元にあった服に気づかず転んでしまいました、自分の手を見てみると……うん、痛いけど鼻血は出てないねよかったよかった……あれ？

「夢なのに痛い？あれ？あれ？……これあれ？リアルという名の現実？」

お父さん、お母さん、妹、そして学校の私の友人たちよ。私はどうやら本当に転生もとい憑依をしてしまったようです！……

？？？じゃねえ！　フラン　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

初めての食事だよ！・・・人肉ってなにさ！？

フラン　ｓｉｄｅ

みんなおはよ～、憑依仕立ての女子高生……もういいや、フランだよ～。

今私は朝食の時間です、紅魔館ってお金持ちなイメージだよね。てか実際そうです。
あの咲夜さんの手料理が食べられるなんてなんて私得？みたいな感じで非常にテンションがハイですよ！！

「妹様、朝食をお持ちましたわ。」

「あ、おはよう咲夜。」

てなわけで私の部屋にお皿を持って現れた紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。

さて、いきなり朝食とか言われても前の話しを見た人はあの後どうなったの？と思ってる人もいるかもしれないので軽く状況説明をば。

あの能力検証の後に咲夜さんがまず来て何があったのかを聞いてきました、あの爆発音外まで響いていたんだね……

それで私は生咲夜！！とその時も今に負けずのテンションハイだったわけですが、あまり不審がられるの嫌だったので記憶にあったフランのしゃべり方でその場は免れました、ていうよりもなぜか脳内の言葉とは違って言葉を口にすると勝手にフランの言葉使いに変換されてしまうようなのです。

そのあとお腹が空いたな～って言ったら咲夜さんが朝食をお持ちしますと言っていつの間にか消えていました、あれが時間を操る力なんですね。咲夜さん本当に人間ですか？

それでどうせなら現在の時間軸を知りたいと思いいざ行動。
咲夜さんがいなくなった後に扉を開けて外に出ようと思ったけどなぜか開かない。どうやら強力な封印結界が張ってある模様です。ということはまだ時代は紅魔異変の前くらいなのではないかと予想。

ということは私は霊夢達と戦わないといけないの？？無理無理！あんな人の領域を外れた化け物をどうやって相手しろと？私は確かに今はフランだけど戦いなんて一回もしたことなんてないし……でも行動を起こさなかったら私はずっとこの薄暗い狭い部屋の中で一生過ごすことになってしまうかもしれない。

「そんなのは絶対嫌だ！」

フランになってしまったからではない、憑依前でもこんな監禁染みた生活をずっと続けるなら本当にどうにかなってしまう。恐いけど戦うしかないよね、がんばろう私！

「よし、まずは基本のｒ「お待たせしましたわ妹様」ひゃぁ！！」

ちょっといきなり現れないでくださいよ咲夜さん！心臓止まっちゃうかと思ったじゃないですか！二次小説の主人公たちが心臓に悪い登場の仕方と言ってたのがわかった気がしますよ……

「すみません、驚かせてしまいましたか？」

「う、うん……ほんのすこしね。」

ほんのすこしじゃありません、ものごっつう驚きました。そ・れ・よ・り・も～♪

「咲夜～、ご飯ご飯♪」

さっきから待ち望んでいました咲夜さんの手料理！ああ楽しみだな～！！

「かしこまりました、どうぞお召し上がりくださいませ。」

「うん！ありがと～！！　いただき……」

スッと差し出された料理を食べようとナイフとフォークを構えいざ食べようとしたとき私は固まった。

「咲夜……何？これ……」

おかしいな、なんか人の腕と足みたいなのが見えるよ？それになんだが周りの赤いお汁みたいなのからは鉄の匂いがする……

「はい、本日の献立は人肉のソテーと人肉のスープです。」

とてもいい笑顔で言う咲夜さん、人肉って……無理なんだけど私！これ食べるとか絶対無理なんですけど！！

「えっとね……咲夜、今まで人肉の料理を出してきたと思うんだけど……あのね……」

「？はい、これはいつもと変わらない料理ですが……」

ゲームでは語られないフランの新事実キターーー！！
あんな……あんな可愛いお子様が人の腕と足をムシャムシャ……
…嫌ーーーー！！
駄目よ、もう私のライフはゼロに近いわ。こんな事実があったなんて……もう私フランだから我慢我慢♪いっただっきま～す……
なんてできるかぁー！！

「えっとね、咲夜……人肉はもういいかな。普通の料理が食べたいな～みたいな。」

「普通の料理……ですか？」

「うん、別に咲夜が作ってくれる料理が嫌だなんて思ってるんじゃないよ？ただね……普通の人達が食べる料理がいいの。私の食事の為に誰かが死ぬなんて悲しすぎるからね。」

あれ？咲夜さんが目を見開いて何かに驚いている、私何か間違ったこと言ったかな？

「……かしこまりました、それではこの料理は下げさせていただきますね。何か料理のご要望はありますでしょうか？」

少し考えた後咲夜さんはこう言った、そうだな～。咲夜さんの料理

は何でもおいしそうだし……

「う～ん……ハンバーグとかでも大丈夫？」

「ハンバーグですね、かしこまりましたわ。ちょうどいいお肉を昨日人里で仕入れることができましたので。」

「それは人肉じゃないよね！？」

私は咲夜さんの言葉に即座に反応、人里で仕入れた肉→人里で殺した人の肉というふうに聞こえてしまったからであります。

「ふふ、ご安心ください。ちゃんとしたお肉ですよ。」

あ、すこし笑われちゃった。恥ずかしいよ～／／／／

「もう笑わないでよ！！……でも、ありがとう咲夜！！ハンバーグ楽しみしてるからね！！」

私はこれでもかというくらい満面の笑みで咲夜にありがとうと言う。もう今ならどんなに悪口を言われてもお姉さん許しちゃうぞ？

「／／／そ、それでは失礼させていただきますね！」

「うん……あ、もういない。」

なんか咲夜さんが消えちゃう瞬間顔が赤かった気がするよ、どうしたのかな～。

「でもでも！ハンバーグ楽しみだな。早く来ないかな～♪」

私は胸を躍らせながら咲夜さんの手料理を待つのでした。

フラン　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

咲夜　ｓｉｄｅ

この小説初めての語り手ね。よろしくお願いするわ。

さて、早速だが私は今非常に困惑している。
理由は簡単、妹様の事。今日の妹様は明らかにおかしい、いつもは人肉を入れた料理を持っていってもまたかという顔はするけれど食べはしてくれた。しかし今日は今後は普通の料理を食べたいと言わ

れたのだ。私としては別にそれはどうということはないのだが何より気になったものがあった。

「妹様の瞳に狂気が見えなかった……」

そう、いつもは私も万全の状態で妹様の部屋に足を踏み入れている。なにせ今日も地下から爆発音が聞こえまた能力の暴走かと思っていたからだ。、だがいざ部屋を見てみると確かに何かを破壊した形跡は見られたが妹様は、「お腹空いたな～」である。

信じられないことだが狂気の一欠けらも見えなかった。
私の仕えるレミリアお嬢様からも、妹様の危険度の高さは重々聞いている。
それはほかのこの館にいるパチュリー様、小悪魔、美鈴はもちろん周知の事実だ。

だから妹様が生まれてから今までずっと外には出さず地下に幽閉していた、それはおそらくこれからも変わらないだろう、でも……

ーーありがとう咲夜！！ハンバーグ楽しみにしてるからね！！ーー

「……／／／」

あの妹様の顔を思い出すと私の顔が赤く染まるのがわかる、体の体温が上がっていることも……
今まで私が見たことのない妹様の笑顔だった、狂気に染まった笑みではなく、正真正銘心からの笑顔だと私は思う。

なぜあのように急激に変わってしまったのかはわからない、でもそんなことは今はどうでもいい。

「もうすこし、あの笑顔を見ていたい。」

私は今まで妹様を避けてはいなかったが別段気にかけていたわけではなかった、だけど今はすごく気になる。あの笑顔を見たときからすごく……

「ダメね、今は妹様に喜んでもらえるようにハンバーグを作らなきゃ。」

そう言って私は袖を捲る、初めてかな。こんなにも私の作る料理で喜んでほしいと思ったのは。

「待っていてください妹様、この咲夜が最高の料理を作らせていただきますわ！」

咲夜 side end

変わる紅魔館

フラン　side

咲夜さんの作ってくれたハンバーグおいしかったよ～！！
すみません、あまりのおいしさにテンションがおかしくなってしまいました。

そういえば私がハンバーグを食べてた間ずっと咲夜さんが鼻を押さえていたけどどうしたんだろう……

ーーその時の光景ーー

「お待たせしましたわ妹様。」

「わぁ～！！ありがとう咲夜！！」

「／／／お召し上がりください。」

「うん！！いっただっきま～す♪……おいしい～！！」

「そ、それはよかったですわ。（何なのこの妹様は！！こんなに可愛いだなんてお持ち帰り……いえ、いけないわ咲夜。それだけはしてはダメよ、でも……）」

「あむ……あむ……おいひいよ～♪」

「ぐはぁ！！（いけないわ、あまりの可愛さに私の鼻から大量の忠誠心が！！）」

「はむ……はむ（咲夜さん、さっきから鼻抑えてどうしたんだろう。何か赤い物が滴り落ちてる気がするけど今はこの食事を楽しみましょ♪）」

ーー時間は戻りーー

う～ん、今考えても本当にあれは何だったんだろうね～。

それはそうと咲夜さんから聞いたけどどうやらもうすぐレミリアが行動を起こすらしい。

「もうすぐ紅魔異変かぁ～。戦うのは嫌だけどドキドキするなぁ♪」

そうです、私は戦いは嫌だけどなんかドキドキする。原作キャラに会えるのもあるけど何より、この部屋の外を見ることができるんだ！

「……フランもこんな気持ちだったのかな。」

フランもこうやって何年も外に出られるのを待ってたんだと思う。
咲夜さんに外に出たいと言った時咲夜さんはもちろん許可をしなかった。
わかってはいたけど私は少し残念だった、その時の申し訳のなさそうな顔をしていた咲夜さんがすごく印象に残っている。

「落ち込んでいても仕方ない！私にできることを探してみよう。」

そうだよね、落ち込んでいてもしょうがないもの。でも……

「私ここから出れないよ〜〜。」

何か……何かあるさきっと。

フラン　side　end

レミリア　side

咲夜に引き続き新たな語り手は私だな、ごきげんよう。紅魔館の主、レミリア・スカーレットだ。
誇り高き吸血鬼、私はこれよりこの幻想郷を紅の霧によって覆い尽くし私の悲願である、太陽の光を気にすることなく外を出歩けるようにするという素晴らしい夢に向かって進んでいくのだ。

「どうでもいいけどレミィ、あなたのその野望はカリスマのカの字もないから。」

「パチェ！？」

ふふふ、いきなり何を言うのだこの友人は。このカリスマで溢れる誇り高き吸血鬼の私に対してそのようなことを……

「だからそんなことを言ってる時点でカリスマなんてないのよ。」

「うぅ～～～、さくや～～～～！！」

パチェに散々言われて私は咲夜に飛びつく。

「パチュリー様、あまりお嬢様をいじめないでください。お嬢様を

いじめていいのは私だけなんですから。」

「咲夜……うん？」

今私を庇ってパチェに注意をしてくれたのは嬉しかった、さすがは私の従者ね！でも最後のほう……なんか聞き逃してはならないことが聞こえた気がするのだけれど。

「咲夜、最後なんか言ってた？」

「いえ、何も言ってませんよ。お嬢様。」

そう……私の空耳だったのかしらね。

「そういえば咲夜、あなたフランにハンバーグを作ったんですってね。」

「あら、そうなの？咲夜。」

それは私も初耳ね、いつもは人間をバラした料理なのだけど。

「はい、妹様が普通の人間が食べる料理が食べたいと言いましたので。」

「普通の人間ねぇ……何かあったのかしら。」

私は考えてみるけど何も思い当たらない、それもそのはずだ。私はこの４９５年間ずっとあの子を閉じ込めているのだから……

「それでお嬢様、一つ気になることがあったのですが。」

「何かしら？」

「はい、実は……妹様から狂気を全く感じなかったんです。」

え？狂気を感じない？そんなことがあるわけ……

「……どういうことかしら、他に変わったことはないの？」

パチェも何かが引っかかってるのね。

「特には……あ。」

「何かあったのね咲夜。」

「はい、実は……」

私は咲夜の口から聞いたことが信じられなかった、どうやらそれはパチェも一緒のようだった。

「……私の食事の為に死んでしまう人間がいるのは悲しい……ね。」

「ありえないわよ、あのフランが心配を？ましてや人間を？」

そうだわありえない、あのフランが……あの“化け物”が人の心配をするなんて絶対にありえない。

「私もその時は驚きました、でもその時は妹様は……本当に姿相応の子供らしさというか、純粋だったというか。」

ふむ……咲夜が嘘を言ってるとも思えない、かといって信じることができない。さっきはフランのことを化け物と言ったけど……妹を信じられないなんて私は……

「レミィ、確かにいろいろと気になることはあるわ。でもこうしていても何もわからない。」

「どうする気？」

「いい機会よレミィ、あの子のことを見てあげたら？もしかしたらあの子は……私たちの思っているよりも成長しているのかもしれない。もちろんいい方向にね。」

「成長……ね。」

あの子を地下から出すのは怖い、怖いのはフランの力じゃない。もちろんそれもあるけど一番は……あの子に憎しみを込めた目で見られることだ。

「ねえパチェ、咲夜。」

私は二人に問いかける。

「あの子は……フランは私を憎んでいるかしらね。４９５年間もあの子をあの狭くて暗い世界に幽閉したこの私を。」

「お嬢様……」

「レミィ……」

ふふ、きっと今の私は酷い顔をしているのだろう。あの時はよかれと思ってしたことが今になって後悔の念に駆られるなんてね。

「たとえ憎まれていたとしても話すことが大切だと思います、お二人は……たった二人の姉妹なのですから。」

咲夜がそう言ってくれる。
姉妹か……そうね、いい機会なのかもしれないわ。

「咲夜、フランをここに呼んできてちょうだい。あの子と話をするわ。」

「……はい、かしこまりましたお嬢様。」

咲夜が微笑みながら了解してくれた、あの時止まった時間を、私たちの運命を今動かそう。

「なによ、そのほうがあなたらしくていいじゃない。レミィ。」

私には聞こえないくらいの声でパチェが微笑みながらそう言った。

レミリア　side　end

溶かされる錠び

フラン　ｓｉｄｅ

皆さんこんばんわ、私は今レミリアの目の前にいます。

これから少し休もうかと思ってた私の部屋にいきなり咲夜さんが現れてレミリアが私が呼んでいると言ってきたんです。

なぜ？私は何かをしてしまったのだろうか……

「フラン？」

おっと、いきなり思考の海に落ちた私を変に思ったのかレミリアが私の名前を呼ぶ。

「え、えっと……何かな……？」

「？……いえ、よく来てくれたわね、思ったより早く来てくれてよかったわ。」

あぁそれね、それなら……

「それなら大丈夫だったよ、私一人じゃこの館の構造全く知らないから迷子になってたと思うけど、咲夜が一緒だったからね。」

それにしても広かったなぁ、さすが紅魔館。

「あ……」

あれ、レミリアが俯いちゃった……そうか！構造全く知らないなんて遠巻きに出歩いたことないから知るわけないよみたいな言い方になっちゃったのかな。

「そ、それよりもわざわざ私を呼んだの。何か理由があるんでしょ？」

私はこの空気が嫌になりさっさと本題に入るように促す、だって私より小さい女の子が今にも泣きそうな顔してたんだよ！？私はお姉ちゃんだからそういうのが苦手なの！

「そうね……フラン少しこっちに来てちょうだい。」

「え？うん……」

私はレミリアの言うとおりレミリアの前に立つ、するとレミリアは私の目を奥を覗きこむように見てくる。一体なにこれ？こんな美幼女に見つめられるとすっごいドキドキしてくるんですけど！？

「えっと……お姉さま？一体……」

「もういいわ、ありがとうフラン（確かに咲夜の言うとおりフランからは狂気が全く感じられない、ほんとに一体何があったのかしら……）」

「う……うん。」

一体何なのだろう、さっきのドキドキはどこへやら、今の私には困惑しかないでござる……

「ねえフラン。」

「何？……お姉さま。」

いきなりレミリアが真剣な面持ちで話しかけてきた、ほんとになん

なの～！？

「あなたは……私を恨んでいるかしら？」

「え……」

恨んでいるってどういう……あぁそういうことね、４９５年間地下に閉じ込めたことを言ってるんだきっと。フランがどう思ってたかはわからないけど今のフランは私なわけで。
私の気持ちを言ってもいいのかな……もう私は前の自分には戻れないのかもしれない、なら私は少しでも幸せな道を選びたい、私だけでなくレミリアたちも幸せになれるような道を。

「う～ん、正直に言うなら……少しだけ寂しかったかな。」

「寂しい……？」

「うん、あの狭い閉ざされた部屋にいて……咲夜しか来てくれなくて……起きてから寝るまでずっと一人ぼっちで……本当に寂しかった。」

これは私の本当の気持ち、たった一日だけどあの空間はとても嫌なものだとわかった。

時折来てくれる咲夜さんのおかげで一時的には気持ちを抑えることもできたけどね。

「そう……」

レミリアが落ち込んでるのがわかる……ああもう！

ーーギュゥーー

お姉さんの前でそんな顔は許しません！そんな子は抱きしめちゃいますよ。

「え？」

いきなり抱きしめた私に驚いているレミリア。うん、やっぱり可愛いなぁ。

「でもね、今日はとても嬉しかったの。お姉さまが呼んでくれたから。」

「あ……フ……ラン……」

「ねえお姉さま。私はお姉さまの妹でいい？お姉さまは私のお姉さまでいてくれる？」

私は少しでもレミリアを安心させるように言う、そういえば昔から小さな女の子には好かれてたなぁ。年上の女の人もだったけど……

「そん……なの……当たり前……じゃない！」

あはは、本当に可愛いなレミリアは。

「うん、お姉さま……大好き！！」

「私もよフラン、私も大好きよ！！」

さっきよりももっと力強くお互いに抱きしめる、気づけば咲夜は泣いていた。その横で先ほどまでいなかったパチュリーがいた、パチュリーもこちらを見て微笑んでいる。

「あの……お姉さま？いつまでこうしてるの？少し恥ずかしいよ……」

そうなんです、こんな美幼女に抱きしめられているのは別に嫌ではないんですがものすごく恥ずかしいです……

「ふふ、もう少しお姉さんに抱きしめられていなさいな。私の可愛いフラン。」

にゃ〜〜！！それ私のセリフーーー！！

「まったくレミィったらさっきまでの不安な姿からは想像できないほど緩みきってるわね。」

「抱き合うお嬢様と妹様……最高ですわ！！」

母のような優しい表情を向けてくるパチュリー、そしてなぜか鼻から手で隠すことなく忠誠心を溢れ出している咲夜さん、いやティッシュあげるよ？その量は幻想の世界だから許されてるだけであって、現実だとお腹を銃で撃たれたくらいの出血量だからねそれ……

「今日はいい日になりそうね、咲夜、今から美鈴と小悪魔を呼んできてくれるかしら。今日はみんなでご飯を食べましょう。」

いいねそれ、ていうか私的には美鈴がご飯を食べてる光景自体が珍百景ですお。

「かしこまりました、それでは腕によりをかけてお嬢様方の舌を唸らせるようなお食事をご用意しますわ！」

やった！また咲夜さんのお料理が食べられるんですね！！

「楽しみだなぁ、咲夜の料理待ってるからね！！」

「／／／はい、それではまた後ほど。」

私の言葉に少し顔を赤くしてその場から消える咲夜、その光景を見ていたレミリアとパチュリーはというと……

「あらあら、咲夜ったら照れちゃって。」

「まさか咲夜！？……ダメよ、いくら咲夜でもフランはダメよ！！」

いや、何がダメなのさレミリア。
というよりレミリアってもしかしてかなりのシスコンなのかな。
そんなことを私が考えているとパチュリーが声をかけてきましたよ。

「それはそうと……久しぶりねフラン。」

「うん、久しぶりパチェ。」

うん、対応はこんな感じで大丈夫なはず。思えばフランとパチュリーの絡みなんてあまり見たことなかったかも。

「あなたと話してみたいことがいろいろあるのよ、よかったらあとで図書館に来てくれないかしら？」

「わたしと？うん、わかった。」

何だろう話しって、するとそこで扉が開き二人の人物が入ってきた。

「咲夜さんに呼ばれたので来ました～。」

パチュリーと共に図書館を管理している小悪魔と。

「久しぶりのご飯、感動ですよ～。」

紅魔館の門番、紅美鈴だった。

「あら、よく来てくれたわ二人とも。もうすぐ咲夜が料理を持ってくると思うからそれまでゆっくりしていてちょうだい。」

「は～いって……妹様！？」

「え！？どうしてここに……」

二人が私を恐怖の目で見ている、それもそうだね。ずっと地下に幽閉されていたんだし二人は私がお姉さまと仲直りしたことを知らないんだもの。私から話そう、二人とも仲良くなりたいしね！

「久しぶり……かな。小悪魔、美鈴」

「はい……そうですね……」

「お、お久しぶりです……」

「今はまだ私のこと、怖いと思うけど……今すぐじゃなくてもいい、これからの私を見ていてほしいの。その上で……あなたたちの家族の一員として私のことを扱ってほしい。」

これが妥当な答えかな、すると二人は目を見開いて驚いている。そんなにフランがこんなこと言うと珍しい事なのかな……

「えっと……確かに怖いと思いました、でも……今の妹様からはとても優しい何かを感じます。随分と言うのが遅くなってしまいましたが、これからよろしくお願いします、妹様。」

「小悪魔。」

「私もちょっと混乱してるんですけど……確かに今の妹様からは小悪魔の言った通り狂気とは違う優しい何かを感じます、私はこれからも紅魔館の門番として、妹様も守る盾となります。よろしくお願いしますね、妹様。」

「美鈴。」

あはは、こんなに想われるなんて私は幸せだね。
他人に思われることがこんなに温かくて、嬉しい事だなんて……

「料理の準備ができましたわ、食堂においでください。」

咲夜も戻ってきた、これで紅魔館メンバー全員揃ったね、私はそれを確認するとみんなの顔が見える位置に立ち。

「これから……よろしくお願いします！！」

私はこの大切な家族を守っていきたい。
私の持つありとあらゆるものを破壊する能力、この力を家族を守るために使いたい。
さしずめ言わせてもらえば“ありとあらゆるものから守る能力”なんか大げさかな。

私(フラン)はこうしてやっと本当に紅魔館の一員になったのだった。

フラン　side　end

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6578z/

妹様に憑依しちゃったよ！・・・・・・嘘だといってほしい・・・・・・

2011年12月23日01時58分発行